劉向『列女傳』と趙飛燕姉妹批判

仙石知子

はじめに

前漢の劉向が著した『列女傳』[一]は、中国近世では「女四書」と並ぶ女訓書として受容されていた。[二]しかし、班固の『漢書』によれば、劉向は、『列女傳』の執筆意図を次のように考えていたという。

（劉）向　俗の彌〻奢淫にして、趙・衞の屬　微賤より起こり禮制を踰ゆるを睹る。向　以爲へらく、王教は内より外に及ばば、近き者より始むべしと。故に詩・書に載する所の賢妃・貞婦を採取して、興国・顯家の法則とす可く、孽嬖もて亂亡する者に及ぶ。序次して列女傳を爲ること、凡そ八篇、以て天子を戒む。及び傳記・行事を采り、新序・說苑を著はすこと凡そ五十篇、之を奏す。[三]

「趙・衞の屬」とは、顔師古注によれば、趙皇后（趙飛燕）と趙昭儀（趙飛燕の妹）、そして、衞婕妤（李平）のことである。彼女たちによる国政の紊乱を憂いた劉向は、『詩經』・『尚書』に載せる「賢妃・貞婦」を規範とすることにより国家を興隆させ、「孽嬖」が国家を乱亡させたことに鑑みて「天子を戒」めるために、『列女傳』・『新序』・『說苑』を著したという。池田秀三は、これを儒家的政治道徳を宣揚し、外戚・後宮の専横を抑制するために著されたものと評価している。[四]

それでは、劉向が仕えた成帝の国政を紊乱した趙皇后（趙飛燕）・趙昭儀（趙飛燕の妹）への批判は、具体的にはどのような形で『列女傳』に反映しているのであろうか。趙飛燕姉妹の国政への影響を踏まえたうえで、それへの批判が色濃く表れる『列女傳』の叙述の中から劉向の執筆目的とその『列女傳』への反映を検討していこう。

一、政治闘争から執筆へ

『漢書』巻三十六　楚元王傳附劉向伝によれば、劉向は、劉邦の末弟である劉交を始祖とする楚元王家に生まれた。劉向は若年、宣帝の求めに応じて、暗唱していた『枕中鴻寶苑祕書』を献上したが、その本に記された方法で金が精製できなかったので、責任を問われ、死刑を言い渡された。父と兄の努力により許された劉向は、儒教に

傾倒し、やがて『春秋穀梁傳』を修めて石渠閣會議に参加し、宣帝好みの經義を持つ『春秋穀梁傳』を官学とするのに力を尽くした。(五) 献上した本のために死ぬ思いをした黄老思想を棄て、儒教を修めることで皇帝権力の強化、そして教化を計ろうとしたのである。やがて、劉向は子の劉歆と共に宮中の図書を整理し、劉歆は「七略」という目録を作って、儒教を諸子百家の頂点に位置づけていく。(六)

宣帝が崩じると、元帝のもと、劉向は宗正となり散騎常侍を兼ねた。そのころ、宮中では宦官の石顯と外戚の許氏と史氏が、専権を振るっていた。これに対抗して、かつて太子太傅であった蕭望之と周堪は、皇帝権力の弱体化を防ごうとした。劉向は、二人に協力して石顯と対決し、許氏の横暴を批判したが、皇帝は耳を貸さなかった。やがて、蕭望之は自殺し、劉向は投獄された。これより十年余り、劉向は官界から離れる。元帝崩御の後、即位した成帝により、劉向は再び任用された。劉向は、元帝の時と同様に政治を改善すべく上奏を行ったが、それ以上に、儒教の教えにより皇帝を導こうとした。このための書籍の一つが『列女傳』なのである。

成帝期最大の政治問題は、後嗣の不在にある。それは天の祭祀を揺るがすほどであった。丞相の匡衡は、張譚と共に、帝王の最も重要な任務が天の秩序を受けるための郊祀にあるとし、天を都の南の郊外に祀るという儒教に基づく郊祀制度を実現すべしと主張した。成帝は、この上奏に基づき、建始元（前三二）年、雍五畤・甘泉泰畤・河東后土の三祀を廃止して、長安に南北郊を設けた。ところが、成帝に後嗣が得られず、また天変地異が続いたこともあって、長安の南北郊は興廃を繰り返した。(七)

天の祭祀のあり方を揺るがすほどの後嗣の不在をもたらした者こそ、趙飛燕姉妹であった。とくに妹の趙昭儀は、成帝の後嗣となるはずだった二子の殺害に直接的に関わっている。趙飛燕の立后の経緯と趙飛燕姉妹が共に子を生まなかったことから確認しよう。

孝成趙皇后は、本 長安の宮人なり。初め生まれし時、父母 擧げず。三日 死せざれば、乃ち収めて之を養ふ。壯なるに及び、陽阿主家に屬し、歌舞を學び、號して飛燕と曰ふ。成帝 嘗て微行して出で、陽阿主を過りて樂を作す。上 飛燕を見て之を説び、召して宮に入れ大いに幸す。女弟有れば復た召し入れ、俱に倢伃と爲す。貴なること後宮を傾く。許后の廢せらるるや、上 趙倢伃を立てんと欲す。皇太后 其の出づる所 微なること甚だしきを嫌ひ、之を難ず。……上 立てて趙倢伃の父たる臨を封じて成陽侯と為す。後 月餘にして、乃ち倢伃を立てて皇后と爲す。……皇后 既に立つや、後に寵 少しく衰へ、而るに弟 絕だ幸せられ、昭儀と爲る。……姉弟 寵を顓らにすること十餘年なるも、卒に皆に子無し。(八)

出生後すぐに親に見放された趙飛燕は、歌舞により成帝の寵愛を受けた。皇后となり、自らの寵愛が衰えたあとは、妹の趙昭儀が寵愛を受けた。しかし、寵愛を専らにしながら、趙飛燕姉妹には子ができなかった。そうしたなか、妹の趙昭儀は、曹宮・許美人が生んだ、成帝の後嗣二人を殺害するのである。成帝崩御の後、即位した哀帝の司隷校尉である解光が、事情を知る掖庭獄丞の籍武・趙昭儀の御者の于客子・中黄門の王舜らの証言からまとめた、曹宮の生んだ子を殺害した情況を説明する調書から掲げていこう。

（籍）武 卽ちに書もて對へ、「兒 見在す、未だ死せず」と。有頃、（于）客 出でて曰く、「上と昭儀 大いに怒り、「奈何ぞ

殺さざる」と。武 叩頭して啼びて曰く、「兒を殺さずんば、自ら死に當たるを知る。之を殺さば、亦た死す」と。卽ち客に因りて封事を奏りて曰く、「陛下 未だ繼嗣有らず。子に貴賤無きをば、唯だ意に留めよ」と。奏 入るや、客 復た詔記を持し武に予へて曰く、「今夜 漏上五刻、兒を持し（王）舜に與へよ。東交掖門に會へ」と。武 因りて客に問ふ、「陛下 武の書を得られ、意 何如」と。曰く、「慭するなり」と。武 兒を以て舜に付す。舜 詔を受け、兒を殿中に內れ、爲に乳母を擇びて告ぐ、「善く兒を養へ、且に賞有るべし。漏泄せしむること毋かれ」と。舜（張）棄を擇び乳母と爲す。時に兒 生まれて八九日なり。後 三日、客 復た詔記を持して、封すること前の如くなるをば武に予ふ。中に小さき緣の篋を封する有り。記して曰く、「武に告ぐ。篋中の物書を以て獄中の婦人に予へ、武 自ら臨みて之を飲ませよ」と。武 發するに篋中に裹藥二枚有り、赫蹏に書して曰く、「偉能に告ぐ。努力して此の藥を飲め。復た入る可からず。女 自ら之を知れ」と。偉能は卽ち宮なり。宮 書を讀み已はりて曰く、「果たしてなり。姉弟 天下を擅にせんと欲す。我が兒男や、額上に壯髮有りて、孝元皇帝に類る。今 兒安こに在るや。危にも之を殺さんとす。奈何ぞ長信をして得て之を聞かしむるに」と。宮 藥を飲みて死す。……棄 兒を養ふ所十一日なり。宮長の李南 詔書を以て兒を取り去り、置く所を知らず。[九]

曹宮の生んだ子が殺されたか否かは、「置く所を知らず」とされるだけで、司隸校尉の解光の調書からは、判断できない。成帝は、宦官の王舜を使って、子を宮中に匿わせる努力はした。しかし、歴史的な事実として、この子が史上に出現することはなかった。趙昭儀は、殺せと怒るだけで、子に手を下したことは記されない。ただし、その狙いは、曹宮の「姉弟 天下を擅にせんと欲す」という言葉に込められている。

続けて、司隸校尉の解光が趙昭儀の御者の于客子・王偏・臧兼の証言により調査した、許美人が生んだ子の殺害事例について掲げよう。

昭儀 成帝に謂ひて曰く、「常に我を紿きて中宮より來たると言ふ。卽ち中宮より來たれば、許美人の兒 何こによりて中に生まる。許氏 竟に當に復た立つべきや」と。懟みて手を以て自ら擣き、頭を以て壁・戶・柱に擊ち、牀上より自ら地に投じ、啼泣して食ふを肯ぜずして曰く、「今 當に安こに我を置かんとす、歸らんと欲するのみ」と。帝曰く、「今 故をば之に告ぐるに、反りて怒をば爲す。殊に曉す可からざるなり」と。帝も亦た食はず。昭儀曰く、「陛下 自ら是なるを知らば、食はざるを爲すは何ぞや。陛下 常に自ら言ふに、約して女に負かずと。今 美人に子有り、竟に約に負けり、何をか謂ふや」と。帝曰く、「約するに趙氏を以てす、故に許氏を立てず。天下をして趙氏の上に出づる者無からしむ、憂ふること毋かれ」と。後に詔して嚴をして緑の囊書を持し許美人に予へしむ。嚴に告げて曰く、「美人 當に以て女に予ふるもの有るべし。受け來たりて、飾室中の簾の南に置くべし」と。美人 葦篋一合を以て生む所の兒を盛りて、緘封し、及び緑の囊に書を報じて嚴に予ふ。嚴 篋書を持し、飾室の簾の南に置きて去る。帝 昭儀と與に坐し、客子をして篋の緘を解かしむ。未だ已はらざるに、帝 客子・偏・

兼をして皆 出でしめ、自ら戸を閉めて、獨り昭儀と與に在り。須臾にして戸を開き、客子・偏・兼を嘑び、篋及び綠綈の方底を緘封せしめ、推して屏風の東に置く。（呉）恭 詔を受け、篋方底を持し武に予ふるに、皆 御史中丞の印を以て封じて曰く、「武に告ぐ。篋中に死兒有り。屏處に埋め、人をして知らしむること勿かれ」と。武 獄の樓垣の下を穿ちて坎と爲し、其の中に埋む。(一〇)

許美人が子を生んだ際には、趙昭儀の嫉妬が活写される。趙昭儀をなだめきれなくなった成帝は、許美人から子を取り上げ、趙昭儀と二人でこれを殺す。それが、「獄の樓垣の下」に埋められたことまで、司隷校尉の解光は、哀帝に報告している。解光の報告よりさき、成帝が崩御した際に、趙昭儀は自害している。哀帝は、残された趙皇太后（趙飛燕）には擁立された恩があり、また傅皇太后も趙皇太后を恩遇したので、趙皇太后を殺さなかった。やがて哀帝が崩御すると、王莽は元太皇太后に申し上げ、趙皇太后を庶民に落とし、自殺させる（『漢書』巻九十七下 外戚傳下）。

劉向は、成帝に趙飛燕姉妹が寵愛され、妹の趙昭儀が嫉妬から後嗣を殺害するような政治情況を背景として『列女傳』を著した。したがって、『列女傳』の中には、趙飛燕姉妹を批判する話が収録される。ただし、それらは趙飛燕姉妹を名指しした話ではなく、他の事象により批判したものである。それについては、三・四で検討することにして、次に、劉向の『列女傳』を書き継いだ『続列女傳』の中に見られる趙飛燕姉妹の話を検討しよう。

二、『続列女傳伝』の趙飛燕姉妹像

現行の劉向の『列女傳』は、北宋の嘉祐年間（一〇五六～六三年）に刊行された、曾鞏・王回（編定）『古列女傳』九巻を祖本とする。そこにはすでに、傳文七巻と頌一巻のほか、続列女傳一巻が付されていた。(一一) 班昭の作とされることもある『續列女傳』は、趙飛燕姉妹を次のように伝えている。

趙飛燕姉娣なる者は、成陽侯たる趙臨の女、孝成皇帝の寵姫なり。……成帝 常て微行し、出でて河陽主に過り樂をば作す。上 飛燕を見て之を悅び、召して宮に入れ大いに幸す。女弟有り。復た召し入る。俱に婕妤と爲し、貴なること後宮を傾く。乃ち父の臨を封じて成陽侯と為す。頃有、飛燕を立て皇后と爲す。其の弟を昭儀と爲す。飛燕 后と爲りて寵 衰ふるも、昭儀の寵比するもの無し。(一二)

趙飛燕の生い立ちから皇后となり、その妹が昭儀となるまでの『續列女傳』の記述は、『漢書』とほぼ同じである。『續列女傳』の著者が、『漢書』外戚傳の趙飛燕姉妹の記述を元に伝記を著したことを理解できる。ただし、『續列女傳』は、許美人と曹宮の記述の順が逆であることに加え、叙述も『漢書』そのままではない。許美人の叙述を掲げよう。

姉娣 寵を專らにすれども悉く子無し。嬌媚 不遜たりて、後宮を嫉妒す。帝 許美人を幸して子有り。昭儀 之を聞き、帝に謂ひて曰く、「常に我を紿きて中宮より來たりとす。今 許美人の子 何こより生まるるや」と。懟みて手を以て自ら掏き、頭を以て柱に擊ち、床上より自ら地に投じ、涕泣して食はずに曰く、

「今 當に安こに我を置かんとす、歸らんと欲するのみ」と。帝曰く、「我 故をば之に語ぐるに、反りて怒りをば爲す」と。亦た食はず。昭儀曰く、「陛下 自ら是の如し、食はざるは何を謂ふや。陛下 常に言ふ、約して汝に負かずと。今 許美人に子有り。竟に約に負けり、何をか謂ふや」と。帝曰く、「約するに趙氏を以てす、故に許氏を立てず。天下をして趙氏の上に出づる者無からしむ。憂ふること無かれ」と。乃ち許氏夫人に詔し、生む所の兒を殺さしむ。革篋もて盛り之れを緘す。帝 昭儀と共に視て、復た緘封するに御史中丞の印を以てし、出だして獄垣の下に埋む。(二三)

このように、『續列女傳』は、『漢書』に従って許美人の子が抹殺される状況を描く。『漢書』は、司隷校尉の調書を元にしているため、子を殺すまでの経緯が詳細であり、成帝と趙昭儀が殺害したことを示唆する。これに対して『續列女傳』は、許美人に自分の生んだ子を殺させたと明記し、子が殺されていく過程の描写に重きを置いていない。それよりも、なぜ子が殺されたのか、という原因が明確にされている。『漢書』には記されない「嬌媚 不遜たりて、後宮を嫉妒す」という言葉があることから、驕慢で成帝に媚びる趙飛燕姉妹が、成帝から寵愛を受ける後宮の他の女性たちに嫉妬したために、許美人は自らの手で子を殺すことになった、と『續列女傳』は主張するのである。『續列女傳』は、女性の悪として「嫉妬」を強調していると言えよう。そうした特徴は、曹宮の叙述にも現れているのであろうか。

中宮の史たる曹宮、字は偉能、御幸せられ子を生む。帝 復た昭儀の言を用ひ、①男女を問ふこと勿く之を殺さんとす。宮 未だ殺さず、昭儀 怒る。掖庭獄丞の籍武、中黄門に因りて事を奏して曰く、「陛下 繼嗣子無し。貴賤と無く唯だ意を留めよ」と。帝 聽かず。時に兒 生まれて八九日、遂に取り去りて之を殺す。②昭儀 偉能に書及び藥を與へ自死せしむ。偉能 書を得て曰く、「果たして姉弟 天下に擅にせんと欲す。且つ我が兒 額上に壯髪有りて、元帝に似たり。今 兒 安こに在るや。已に之を殺すか」と。乃ち藥を飲みて死す。③自後、御幸せられて子有る者は輒ち死し、或いは藥を飲みて死す。是れに由り、成帝をして嗣無からしむ。成帝 既に崩じ、外蕃を援立するも、仍りに繁育せず。(二四)

曹宮の子の殺害について、『續列女傳』は、①「男女を問ふこと勿く」殺そうとしたと記すが、『漢書』にこうした記述はない。成帝と趙昭儀の狂態を強調する表現となっており、後継者としての資格を有さない女児の出生でさえ許さない趙昭儀の嫉妬の激しさが鮮明に描かれている。また、『漢書』では、成帝が曹宮に書簡を与え、薬を飲ませるよう指示したと記されるが、『續列女傳』では、②趙「昭儀」が与え、「自死」させたことが明記される。曹宮の死は、成帝という男性が主体となっての結果ではなく、趙昭儀という女性の嫉妬が、成帝の子を孕んだ曹宮に向けられたことによるものなのである。さらに、これ以降、③「御幸せられて子有る者は輒ち死し、或いは藥を飲みて死す」という記述が加えられ、趙昭儀により成帝の後嗣が完全に断たれたことも強調されるのである。

君子謂ふ、「趙昭儀の凶嬖は、褒姒と行を同じくし、成帝の惑亂は、周の幽王と風を同じくす」と。詩に云ふ、「池の竭くるは、濱よりすと云はざるや。泉の竭くるは、中よりすと云はざるや」

と。成帝の時、舅氏 外を擅にし、趙氏 内を專らにす。其の自ら竭き極まるは、蓋し亦た池泉の勢なり。(一五)

『續列女傳』の著者は、「君子謂ふ」と『詩經』大雅 召旻を引用したのち、成帝のときに外戚の王氏が專横したことと共に、趙飛燕姉妹が内で專権を振るったことが、漢滅亡の原因であると総括する。

『續列女傳』の著者は、趙飛燕姉妹の物語を通じて、国君の皇后とその妹が、自分の子を生めないがために嫉妬心を起こし、他の女性やその生んだ子を死に至らせることは、国家そのものの衰亡を招くと主張している。『續列女傳』の著者を特定することは、不可能であるが、よく『列女傳』を読み、その形態だけではなく、主張をも継承していると言えよう。それでは、成帝のもと、趙飛燕姉妹の專横を実見していた劉向は、趙飛燕姉妹こそが禍の根源であるとする自らの主張をどのように『列女傳』に反映したのであろうか。

三、母の鑑

劉向が『列女傳』を執筆した背景には、趙飛燕姉妹が、自分たちは子を生まないことに加えて、嫉妬により他の女性の生んだ子を殺させた結果、後嗣が不在となるという政治問題があった。その重大さは、儒教の経義で最も重要な天の祭祀が、儒教経義に沿った南北郊として実現できないほどであった。それでは劉向は、この問題を解決するために、『列女傳』にどのような女性を描くことにより、成帝を諫めようとしたのであろうか。

劉向の『列女傳』は、理想の母たちの伝記である巻一 母儀傳から始まる。そこには劉向の理想とした母親像が描かれている。たとえば、公金を横領した息子を公衆の面前で叱った「齊の田稷の母」の話、先妻の子供のために命がけで奔走した慈愛深い継母「魏の芒慈母」の話など、優しい姑、賢い妻、厳しい母たちが礼の教えによって子供を立派に育てた話が集められている。

なかでも、周王室の基本を定めた「周室三母」は、周の建国に大きな役割を果たした三人の女性の話で、劉向の成帝への諫言の思いが込められている。

三母なる者は、太姜・太任・太姒なり。太姜なる者は、王季の母にして、有台氏の女なり。太王 娶りて以て妃と爲す。太伯・仲雍・王季を生む。貞順にして率導し、過失有る靡し。太王事を謀るにも遷徒するにも、必ず太姜と與にす。君子謂ふ、太姜 德教を廣むと。……太任 爲に能く胎教すと。古者(いにしへ) 婦人 子を妊(はら)めば、寢ぬるに側せず、坐するに邊せず、立ちて蹕せず、邪味を食せず。割りて正しからざれば食せず、席 正しからざれば坐せず、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聽かず。夜は則ち令瞽をして詩を誦し正事を道(い)はしむ。此の如くんば則ち生れし子の形容 端正にして、才德 必ず人に過ぐ。故に子を妊めるの時、必ず感ずる所を愼む。……太姒を號して文母と曰ふ。文王は外を治め、文母は内を治む。……太姒 十男を生む。長は伯邑考、次は武王發、次は周公旦、次は管叔鮮、次は蔡叔度、次は曹叔振鐸、次は霍叔武、次は成叔處、次は康叔封、次は聃季載なり。太姒 十子を教誨するに、少より長に及ぶまで、未だ嘗て邪辟の事を見せしめず。其の長ずるに及び、文王 繼ぎて之に教ふ。卒に武王・周公の德を成す。(一六)

「周室三母」の女性の事績の中で、現在最も有名なものは、太任

が行った胎教である。母が妊娠中に自らの行いを正すことで、生まれる子に良い影響を与えるという思想は、『列女傳』を起源の一つとする。ただし、劉向の置かれた政治状況に照らし合わせると、最も重要なものは、太姒が十人もの子を生み、育てたことにある。

『詩經』大雅　思斉は、次のように「周室三母」を称えている。

思斉大任　文王之母　思(ここ)に斉たる大任は　文王の母
思媚周姜　京室之婦　思(ここ)に媚たる周姜は　京室の婦
大姒嗣徽音　則百斯男　大姒　徽音を嗣ぎ　則ち百斯の男あり

ここでは、文王の母である大任（太任）が「斉」（慎み深さ）、古公亶父の妃である太姜が「媚」（慈しみ深さ）を称えられることに対して、大姒は「百斯の男」があったことを称えられている。「百斯の男」について、毛傳は、「大姒は十子、衆妾あれば則ち宜しく百子なるべきなり（大姒十子、衆妾則宜百子也）」と解釈をしている。さらに、『毛詩正義』は、「大姒　一人を以て十子有り。妒忌せずして衆妾を進むれば、則ち宜しく百子有るべし（以大姒一人有十子。不妒忌而進衆妾、則宜有百子）」と説明する。この句を大姒(たいじ)の子の多さと、嫉妬をせずに妾を勧めることを称えたものである、と解釈するのである。

劉向は、「周室三母」を次のようにまとめている。

君子謂ふ、「太姒は仁明にして徳有り」と。詩曰く、「大邦に子(むすめ)有り、天の妹に倪(たと)ふ。文　厥(そ)の祥を定め、渭に親迎す。舟を造(なら)べて梁と爲す、顯ならざらんや其の光」と。又　曰く、「太姒　徽音を嗣ぎ、則ち百斯の男ありとは、此れ之の謂なり」と。(一七)

劉向は、『列女傳』の「周室三母」において、『詩經』大雅　思斉で褒められている三人の母のうち、「太姒　徽音を嗣ぎ、則ち百斯の男あり」だけを引用して、「周室三母」の総括としている。すなわち、劉向は、三人の母の中で、太姒が多くの子を生み、妾に嫉妬をせずに、さらに多くの子を生ませられる女性であったことを最も高く評価しているのである。

劉向は、母として慎み深いことよりも、慈しみ深いことよりも、多くの子を生み、さらに男性の愛を独占せずに妾にも子を生ませるような女性の太姒が、周の基礎を築いたことを高く評価する。そこには、劉向が『列女傳』を執筆する目的であった成帝の後宮問題がある。成帝が寵愛していた趙飛燕姉妹は、太姒とは正反対に、子を生まず、成帝の愛を独占し、他の女性が生んだ成帝の子を殺させて、後嗣を絶えさせた。これは、前漢が王莽に滅ぼされる理由の一つになった。悪い女性は、国をも滅ぼすのである。劉向は、成帝を惑わせた趙飛燕姉妹の行為を『列女傳』巻一　母儀傳の「周室三母」の太姒を鑑として掲げることで批判しているのである。それと共に、悪い女性が、国を滅ぼす事例を挙げて、さらなる趙飛燕姉妹への批判を続けていく。

四、傾国の戒め

『列女傳』巻七「孽嬖傳(げつへい)」は、国を滅亡に導いた悪女を収録する。劉向は、手本とすべき女性の話だけではなく、女性が国を滅ぼす恐ろしさも『列女傳』に記している。劉向は、趙飛燕・趙昭儀をみて、漢の滅亡をある程度、予想したのであろうか。ここでは、「孽嬖傳」より衛(えい)の国が混乱した原因を語る「衛宣公姜」を掲げよう。

宣姜なる者は、齊侯の女、衛の宣公の夫人なり。初め宣公の夫

人たる夷姜 伋子を生み、以て太子と爲す。又 齊より娶り、宣姜と曰ひ、壽及朔を生む。夷姜 既に死し、宣姜 壽を立てんと欲す。乃ち壽の弟たる朔と與に謀り伋子を構ふ。公 伋子をして齊に之かしむるに、宣姜 乃ち陰かに力士をして之を界上に待ちて之を殺さしめんとす。(一八)

衛の宣公が娶った後妻の宣姜は、先妻である夷姜の生んだ太子の伋子ではなく、実子の壽を立てようとする。壽の弟である朔と共に宣姜が立てた殺害計画は、意外な結末を招く。

(宣姜)曰く、「四馬・白旄の至る者有らば、必ず要て之を殺せ」と。壽 之を聞きて、以て太子に告げて曰く、「太子 其れ之を避けよ」と。伋子曰く、「不可なり。夫れ父の命を棄つれば、則ち惡んぞ子たるを用ひんや」と。壽 太子の必ず行くを度(はか)り、乃ち太子と與に飲み、之が旄を奪ひて行く。盜 之を殺す。伋子 醒めて、旄を求むれども得ず、遽かに往きて之を追ふも、壽 已に死せり。伋子 壽の己が爲に死するを痛み、乃ち盜に謂ひて曰く、「殺さんと欲する所の者は乃ち我なり。此れ何の罪かあらん、請ふらくは我を殺せ」と。盜 又 之を殺す。二子既に死し、朔 遂に立ちて太子と為る。(一九)

宣姜の伋子殺害計画を知った寿は、それを伋子に知らせたが、伋子は「父の命には背けない」と逃げようとはしない。そこで寿は、伋子の目印である旗を持って賊に襲われ、伋子の身代わりとなって殺された。伋子は悲しみ、賊に自分が本物であると述べて殺された。この結果、生き残った朔が太子となった。渡邉義浩によれば、『詩經』に伝えられる宣姜は、伋子に嫁いだにも拘らず、父の宣公に横取りされたという不幸な女性である。また、『春秋左氏傳』では、あくまで宣姜の意を承けた宣公が殺害を命じたことに対して、「衛宣公姜」では、宣姜を殺害の主体として、衛の混乱を「衛宣公姜」が「孽嬖」であることに求めているという。そうした劉向の主張は、次のように示されている。(二〇)

宣公 薨じ、朔 立つ、是れ惠公爲り、竟終に後無し。亂は五世に及び、戴公に至りて後寧なり。詩に云ふ、「乃ち之の如き人、德音 良無し」とは、此れ之の謂なり。頌に曰く、「衛の宣姜、太子を危ふくせんと謀る。子の壽を立てんと欲し、陰かに力士を設く。壽 乃ち俱に死し、衛 果たして危殆せり。五世 寧ならず、亂 姜に由りて起こる」と。(二一)

このように、劉向は、宣姜が自分の生んだ子を太子に立てようとした欲望が、先妻の子だけではなく実子までも死に追いやると主張した。これは、趙飛燕姉妹が、他人の生んだ子を殺させた行為に近似する。趙飛燕姉妹のあり方を批判的にみていた劉向には、衛の悪女を鑑として漢の世を正したいという思いがあった。また、宣姜の行為の結果、幸運にも即位した朔(恵公)は、結局後嗣に恵まれず、衛の混乱は五代にも亘って続いていく。

劉向は、前漢も衛と同じように、継嗣問題をめぐって混乱が続き、滅びることを予感したのであろう。そうした未来を防ぐため、『列女傳』に悪女の事例を掲げて、成帝に注意を促した。「孽嬖傳」には、趙飛燕姉妹と同じく、姉妹で寵愛を受けた女性の事例として、「魯莊哀姜」の話が収録されている。

哀姜なる者は、齊侯の女、(魯の)莊公の夫人なり。初め哀姜未だ入らざる時、公 數ゝ齊に如き、哀姜と與に淫す。既に入るや、其の弟たる叔姜と與に俱にす。公 大夫の宗婦をして幣

を用て見えしむ。大夫の夏甫不忌曰く、「婦の贄は棗栗を過ぎず、以て禮を致すなり。男の贄は玉帛・禽鳥を過ぎず、以て物を章らかにするなり。今 婦の贄に幣を用ふるは、是れ男女の別無きなり。男女の別は、國の大節なり。乃ち不可なること無からんや」と。公 聽かず。又 其の父たる桓公の廟宮の楹に丹ぬり、其の桷を刻みて、以て哀姜に夸る。(二二)

齊の公女である哀姜は、魯の荘公に嫁ぐ前から、荘公とは私通の関係にあった。哀姜が輿入れしてからは、荘公は、哀姜の媵として随行してきた妹の叔姜と関係を結ぶ。趙飛燕を寵愛していた成帝が、やがて飛燕の妹である趙昭儀に寵愛を移したことと同じである。荘公には、黨氏の娘である孟任が生んだ子般（『春秋左氏傳』荘公三十二年秋）と、叔姜の生んだ開がいた（『史記』巻三十三 魯周公世家）。子を生んでいない哀姜は「驕淫」で、荘公の弟である公子の慶父・公子の牙と私通する。

哀姜 驕淫にして、二叔たる公子の慶父・公子の牙に通ず。哀姜 慶父を立てんと欲す。公 薨ずるや、子般 立つ。慶父 哀姜と與に謀り、遂に子般を黨氏に殺し、叔姜の子を立つ、是れ閔公爲り。閔公 既に立つや、慶父 哀姜と與に淫すること益ゝ甚だし。又 ①慶父と與に謀り、閔公を殺して慶父を立てんとす。遂て卜齮をして襲ひて閔公を武闈に弑さしむ。將に自ら立たんとするも、魯人 之を謀る。慶父 恐れ、莒に奔り、哀姜は邾に奔る。②齊の桓公 僖公を立て、哀姜の慶父と通じて以て魯を危ふくするを聞き、乃ち哀姜を召し、酖して之を殺す。魯 遂て慶父を殺す。詩に云ふ、「啜として其れ泣くも、何ぞ嗟及ばんや」とは、此れ之の謂なり。頌に曰く、「哀姜 邪を好み、魯莊に淫す。延いて二叔に及び、驕妒縦横たり。慶父に是れ依り、國の適 以て亡ぶ。齊桓 征伐し、哀姜を酖殺す」と。(二三)

注（二〇）所掲渡邉論文によれば、『春秋左氏傳』も『史記』魯周公世家も、哀姜の姦通には触れておらず、「公子の慶父・公子の牙・公子の友、皆 荘公の母弟なり。公子の慶父・公子の牙、夫人に通じて、以て公を脅す」と記す『春秋公羊傳』荘公九年が、「魯荘哀姜」の中心的な典拠であるという。

『列女傳』は、『春秋公羊傳』には記されない①慶父と哀姜が共謀により閔公を擁立したことを伝える。これにより哀姜の「孽嬖」なる様は明確にされる。そして、②齊の桓公が僖公を立てると共に、哀姜を酖殺したことも伝えるのである。

哀姜が「孽嬖」となった契機は、荘公がその寵愛を哀姜の媵である妹の叔姜に移したこと、そして自身に子が生まれなかったことに求められるだろう。これは、趙飛燕を寵愛していた成帝が、やがて飛燕の妹である趙昭儀に寵愛を移したことと同じである（注（二〇）所掲渡邉論文）。劉向は、趙姉妹の寵愛への執着と後嗣問題に対する嫉妬心が、国を滅亡へ向かわせるであろう事と、哀姜とその妹の存在が、魯を混乱に陥らせたという二つの事象を結びつけて理解したに違いない。劉向は『列女傳』を綴る中で、漢の滅亡を予想し、国家衰退への危機感をさらに強めていったのではないだろうか。

おわりに

劉向は、成帝に趙飛燕姉妹が寵愛され、妹の趙昭儀が嫉妬から後嗣を殺害するような政治情況を背景として『列女傳』を著した。し

たがって、『列女傳』の中には、趙飛燕姉妹を批判する話が収録される。著者を特定できない『續列女傳』には、『漢書』を種本とした趙飛燕姉妹の話が記され、国君の皇后とその妹が、成帝の寵愛を受けながらも子を生めないがために、嫉妬心を起こし、後宮の他の女性や、その女性が生んだ子を死に至らせることは、国家そのものの衰亡を招くと主張している。

劉向は、『列女傳』巻一 母儀傳の「周室三母」において、胎教で有名な太任を総括の部分では掲げていない。太姒が多くの子を生んだこと、そして、妾を納れることに嫉妬せず、さらに多くの子を得ることのできる女性であったことを最も高く評価している。これは、『詩經』大雅 思斉が、三人の母を並立で褒めることと鮮やかな対比をなす。劉向は、多くの子を生み、さらに男性の愛を独占せずに妾にも子を生ませるような女性の太姒が、周の基礎を築いたことを高く評価する。それにより、成帝が寵愛していた趙飛燕姉妹が、太姒とは正反対に、成帝の愛を独占しながらも、子を生むことはなく、他の女性が生んだ成帝の子を殺させて、後嗣を絶えさせたことを批判しているのである。また、『列女傳』巻七 孽嬖伝では、「衛宣公姜」において、宣姜が自分の子を立てようとした欲望が、先妻の子だけではなく、実子までも死に追いやったと主張し、趙飛燕姉妹が、他の女性の生んだ成帝の子を殺させたことを批判した。そして、趙飛燕姉妹と妹に寵愛が移るという点で共通する「魯荘哀姜」においては、哀姜とその妹による魯の混乱を趙飛燕姉妹による漢の混乱に結びつけて批判した。

劉向は、女性の歴史を繙き鑑として現実を写し出すことで、成帝による後嗣断絶の危機、さらには、漢という国家が滅亡へと向かうことを阻止するために、『列女傳』を著したのである。

注

（一）『列女傳』の研究には、陳麗平『劉向《列女伝》研究』（中国社会科学出版社、二〇一〇年）、鄭先彬『劉向《列女伝頌図》研究』（鳳凰出版社、二〇一三年）、劉潔『《列女伝》的史源学考察――論《列女伝》所反映的先秦至秦漢婦女観念的変遷――』（人民出版社、二〇一六年）のほか、西川陽子「劉向『列女伝』における外戚観」（『学大国文』三〇、一九八七年）、筧久美子「『列女伝』の中の女性像」（『歴史評論』四七九、一九九〇年）、宮本勝「断章取義について――『列女伝』息君夫人の例――」（『語学文学』四〇、二〇〇二年）、末岡実「中国古代女性の生きる知恵――劉向『列女伝』の世界・その一――」（『フェリス女学院大学文学部紀要』三八、二〇〇三年）・「中国古代における母親像の諸相――劉向『列女伝』の世界・その二――」（『玉藻』四二、二〇〇七年）、牧角悦子「中国的「愛」のかたち――劉向『列女伝』に見る女性観をめぐって――」（『生活文化研究所年報』一七、二〇〇四年）、白高娃「劉向の災異思想と『列女伝』」（『後漢経学研究会論集』三、二〇一一年）などがある。

（二）中国近世における『列女傳』の受容については、仙石知子「『列女傳演義』における貞順について」（『中国女性史研究』二八、二〇一九年）、「『列女傳演義』における節義について」（『日本中国学会報』七三、二〇二一年）を参照。なお、「女四書」は、清初に王相が編修した『女誡』『女論語』『内訓』『女範捷録』の四種をいう。これらが代表的な女訓書であったことは、山崎純一『教育からみた中国女性史資料の研究』（明治書院、一九八六年）を参照。

（三）（劉）向睹俗彌奢淫、而趙・衛之屬起微賤踰禮制。向以為、王教由内及外、自近者始。故採取詩・書所載賢妃・貞婦、興國・顯家可法則、及孽嬖

亂亡者。序次爲列女傳、凡八篇、以戒天子。及采傳記・行事、著新序・說苑凡五十篇、奏之（『漢書』卷三十六 楚元王傳附劉向傳）。

（四） 池田秀三「劉向の学問と思想」（『東方学報』（京都）五〇、一九七八年）。なお、下見隆雄『劉向『列女傳』の研究』（東海大学出版会、一九八九年）も参照。

（五） 漢代における春秋學の展開、および『春秋穀梁傳』の特徴と石渠閣會議の政治的意図については、渡邉義浩「両漢における春秋三伝と国政（『両漢における詩と三伝』汲古書院、二〇〇七年、『後漢における「儒教国家」の成立』汲古書院、二〇〇九年に所収）を参照。

（六） 劉歆が「七略」により儒教を頂点として諸子百家を位置づけたことは、渡邉義浩「劉歆の「七略」と儒教一尊」（『東洋の思想と宗教』三五、二〇一八年、『「古典中国」の形成と王莽』汲古書院、二〇一九年に所収）を参照。

（七） 両漢時代における天の祭祀については、渡邉義浩「両漢における天の祭祀と六天説（『両漢儒教の新研究』汲古書院、二〇〇八年、『後漢における「儒教国家」の成立』前掲に所収）を参照。また、南北郊が王莽により完成することは、渡邉義浩「「古典中国」の形成と王莽」（『中国―社会と文化』二六、二〇一一年、『「古典中国」の形成と王莽』汲古書院、二〇一九年に所収）を参照。

（八） 孝成趙皇后、本長安宮人。初生時、父母不舉。三日不死、乃收養之。及壯、屬陽阿主家、學歌舞、號曰飛燕。成帝嘗微行出、過陽阿主作樂。上見飛燕而說之、召入宮大幸。有女弟復召入、俱爲倢伃。貴傾後宮。許后之廢也、上欲立趙倢伃。皇太后嫌其所出微甚、難之。……上立封趙倢伃父臨爲成陽侯。後月餘、乃立倢伃爲皇后。……皇后既立、後寵少衰、而弟絕幸、爲昭儀。……姊弟顓寵十餘年、卒皆無子（『漢書』卷九十七下 外戚傳下）。

（九） （籍）武卽書對、兒見在、未死。有頃、（于）客出曰、上與昭儀大怒、奈何不殺。武叩頭啼曰、不殺兒、自知當死。殺之、亦死。卽因客奏封事曰、陛下未有繼嗣。子無貴賤、唯留意。奏入、客復持詔記予武曰、今夜漏上五刻、持兒與舜。會東交掖門。武因問客、陛下得武書、意何如。曰、愷也。武以兒付（王）舜。舜受詔、內兒殿中、爲擇乳母告、善養兒、且有賞。毋令漏泄。舜擇（張）棄爲乳母。時兒生八九日。後三日、客復持詔記、封如前予武。中有封小綠篋。記曰、告武。以篋中物書予獄中婦人、武自臨飲之。武發篋中有裹藥二枚、赫蹏書曰、告偉能。努力飲此藥。不可復入。女自知之。偉能卽宮。宮讀書已曰、果也。欲姊弟擅天下。我兒男也、額上有壯髮、類孝元皇帝。今兒安在。危殺之矣。奈何令長信得聞之。宮飲藥死。……棄所養兒十一日。宮長李南以詔書取兒去、不知所置（『漢書』卷九十七下 外戚傳下）。

（一〇） 昭儀謂成帝曰、常紿我言從中宮來。卽從中宮來、許美人兒何從生中。許氏竟當復立邪。懟以手自擣、以頭擊壁・戶・柱、從牀上自投地、啼泣不肯食曰、今當安置我、欲歸耳。帝曰、今故告之、反怒爲。殊不可曉也。帝亦不食。昭儀曰、陛下自知是、不食爲何。陛下常自言、約不負女。今美人有子、竟負約、謂何。帝曰、約以趙氏、故不立許氏。使天下無出趙氏上者、毋憂也。後詔使嚴持綠囊書予許美人。告嚴曰、美人當有以予女。受來、置飾室中簾南。美人以葦篋一合盛所生兒、緘封、及綠囊報書予嚴。嚴持篋書、置飾室簾南去。帝與昭儀坐、使客子解篋緘。未已、帝使客子・偏・兼皆出、自閉戶、獨與昭儀在。須臾開戶、嘑客子・偏・兼、使緘封篋及綠綈方底、推置屏風東。（呉）恭受詔、持篋方底予武、皆封以御史中丞印曰、告武。篋中有死兒。埋屏處、勿令人知。武穿獄樓垣下爲坎、埋其中（『漢書』卷九十七下 外戚傳下）。

（一一） 劉向『列女傳』の形態と伝播については、仙石知子「『列女傳』研究序説―中国近世における受容と流布」（『東洋の思想と宗教』三五、二〇一八年）を参照。

（一二） 趙飛燕姉娣者、成陽侯趙臨之女、孝成皇帝之寵姬也。……成帝常

微行、出過河陽主樂作。上見飛燕而悅之、召入宮大幸。有女弟。復召入。俱爲婕妤、貴傾後宮。乃封父臨爲成陽侯。有頃、立飛燕爲皇后。其弟爲昭儀。飛燕爲后而寵衰、昭儀寵無比（『列女傳』巻八 續列女傳 趙飛燕姊娣）。本稿は、梁端（校注）『列女傳』を底本とするが、「續列女傳」を含まないため、「續列女傳」は、四部叢刊本『古列女傳』を底本とした。

（一三） 姊娣專寵而悉無子。嬌媚不遜、嫉妒後宮。帝幸許美人有子。昭儀聞之、謂帝曰、常紿我從中宮來。今許美人子何從生。懟以手自掏、以頭擊柱、從床上自投地、涕泣不食曰、今當安置我。欲歸爾。帝曰、我故語之、反怒爲。亦不食。昭儀曰、陛下自如是、不食謂何。陛下常言、約不負汝。今許美人有子。竟負約、謂何。帝曰、約以趙氏、故不立許氏。使天下無出趙氏之上者。無憂也。乃詔許氏夫人、令殺所生兒。革篋盛緘之。帝與昭儀共視、復緘封以御史中丞印、出埋獄垣下（『列女傳』巻八 續列女傳 趙飛燕姊娣）。

（一四） 中宮史曹宮、字偉能、御幸生子。帝復用昭儀之言、①勿問男女殺之。宮未殺、昭儀怒。掖庭獄丞籍武、因中黄門奏事曰、陛下無繼嗣子。無貴賤唯留意。帝不聽。時兒生八九日、遂取去殺之。②昭儀與偉能書及藥令自死。偉能得書曰、果欲姊弟擅天下。且我兒額上有壯髮、似元帝。今兒安在。已殺之乎。乃飲藥死。③自後、御幸有子者輒死、或飲藥死。由是、使成帝無嗣。成帝既崩、援立外蕃、仍不繁育（『列女傳』巻八 續列女傳 趙飛燕姊娣）。

（一五） 君子謂、趙昭儀之凶嬖、與褒姒同行、成帝之惑亂、與周幽王同風。詩云、池之竭矣、不云自濱。泉之竭矣、不云自中。成帝之時、舅氏擅外、趙氏專內。其自竭極、蓋亦池泉之勢也（『列女傳』巻八 續列女傳 趙飛燕姊娣）。

（一六） 三母者、（大）〔太〕姜・（大）〔太〕任・（大）〔太〕姒。（大）〔太〕姜者、王季之母、有台氏之女。（大）〔太〕王娶以為妃。生（大）〔太〕伯・仲雍・王季。貞順率導、靡有過失。（大）〔太〕王謀事遷徙、必與（大）〔太〕姜。君子謂、（大）〔太〕姜廣于德教。（大）〔太〕任爲能胎教。古者婦人妊子、寢不側、坐不邊、立不躁、不食邪味。割不正不食、席不正不坐、目不視于邪色、耳不聽于淫聲。夜則令瞽誦詩道正事。如此則生子形容端正、才德必過人矣。故妊子之時、必慎所感。……（大）〔太〕姒號曰文母。文王治外、文母治內。……（大）〔太〕姒生十男。長伯邑考、次武王發、次周公旦、次管叔鮮、次蔡叔度、次曹叔振鐸、次霍叔武、次成叔處、次康叔封、次聃季載。……（大）〔太〕姒教誨十子、自少及長、未嘗見邪辟之事。及其長、文王繼而教之。卒成武王・周公之德（『列女傳』巻一 母儀傳 周室三母）。『列女傳』は、梁端（校注）『校注列女傳』（台湾中華書局、一九七〇年）に依拠し、王照圓（補注）『列女傳補注』（華北師範大学出版社、二〇一二年）により校勘し、（ ）を〔 〕に改めた。なお、『列女傳』の版本については、宮本勝「列女傳の刊本及び頌図について」（『北海道大学文学部紀要』三二、一九八三年）を参照。

（一七） 君子謂、（大）〔太〕姒仁明而有德。詩曰、大邦有子、俔天之妹。文定厥祥、親迎于渭。造舟爲梁、不顯其光。又曰、（大）〔太〕姒嗣徽音。則百斯男、此之謂也（『列女傳』巻一 母儀傳 周室三母）。

（一八） 宣姜者、齊侯之女、衞宣公之夫人也。初宣公夫人夷姜生伋子、以爲太子。又娶於齊、曰宣姜、生壽及朔。夷姜既死、宣姜欲立壽。乃與寿弟朔謀構伋子。公使伋子之齊、宣姜乃陰使力士待之界上而殺之（『列女傳』巻七 孽嬖傳 衞宣公姜）。

（一九） （宣姜）曰、有四馬・白旄至者、必要殺之。壽聞之、以告太子曰、太子其避之。伋子曰、不可。夫棄父之命、則惡用子也。壽度太子必行、乃與太子飲、奪之旄而行。盜殺之。伋子醒、求旄不得、遽往追之、壽已死矣。伋子痛壽爲己死、乃謂盜曰、所欲殺者乃我也。此何罪、請殺我。盜又殺之。二子既死、朔遂立爲太子（『列女傳』巻七 孽嬖傳 衞宣公姜）。

（二〇） 渡邉義浩「劉向の『列女傳』と春秋三伝」（『斯文』一三三、二〇一八年、『「古典中国」の形成と王莽』前掲に所収）を参照。

（二一）宣公薨、朔立、是爲惠公、竟終無後。亂及五世、至戴公而後寧。詩云、乃如之人、德音無良、此之謂也。頌曰、衞之宣姜、謀危太子。欲立子壽、陰設力士。壽乃俱死、衞果危殆。五世不寧、亂由姜起（『列女傳』卷七 孽嬖傳 衞宣公姜）。

（二二）哀姜者、齊侯之女、（魯）莊公之夫人也。初哀姜未入時、公數如齊、與哀姜淫。既入、與其弟叔姜俱。公使大夫宗婦用幣見。大夫夏甫不忌曰、婦贄不過棗栗、以致禮也。男贄不過玉帛・禽鳥、以章物也。今婦贄用幣、是男女無別也。男女之別、國之大節也。無乃不可乎。公不聽。又丹其父桓公廟宮之楹、刻其桷、以夸哀姜（『列女傳』卷七 孽嬖傳 魯莊哀姜）。

（二三）哀姜驕淫、通於二叔公子慶父・公子牙。哀姜欲立慶父。公薨、子般立。慶父與哀姜謀、遂殺子般於黨氏、立叔姜之子、是爲閔公。閔公既立、慶父與哀姜淫益甚。又①與慶父謀、殺閔公而立慶父。遂使卜齮襲弒閔公於武闈。將自立、魯人謀之。慶父恐、奔莒、哀姜奔邾。②齊桓公立僖公、聞哀姜與慶父通以危魯、乃召哀姜、酖而殺之。魯遂殺慶父。詩云、啜其泣矣、何嗟及矣、此之謂也。頌曰、哀姜好邪、淫於魯莊。延及二叔、驕妒縱横。慶父是依、國適以亡。齊桓征伐、酖殺哀姜（『列女傳』卷七 孽嬖傳 魯莊哀姜）。